

「津波から命を守るために！」のビデオ制作*

板 東 恭 子**

1. はじめに

近年、気象知識、防災知識の不足のために、命まで失う事例があとをたたない。2004年の台風第6号でも、高波にさらわれ、何人かの方がなくなられた。2003年に発生した十勝沖地震や2002年に発生した沖縄近海の地震では、津波警報や注意報が発表されたにもかかわらず、津波の様子を見るために海岸に近づくなどの事例がみられた。基礎的な気象等の知識、防災情報リテラシー(防災情報を利用するために必要な知識や能力)をいかに一般の方に普及するかは、気象業務を遂行していく上で大きな課題となりつつある。

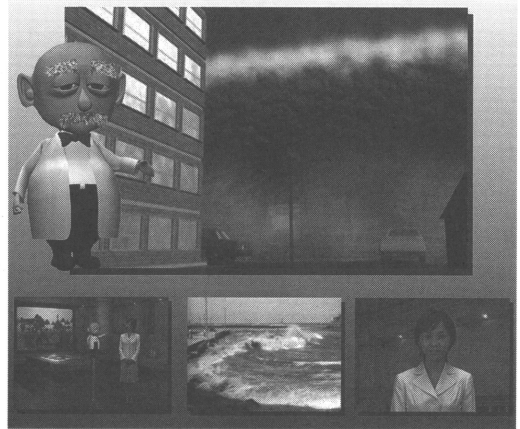
こうしたことをふまえ、この度、気象庁では、津波の恐ろしさについて十分に理解していただくとともに、津波の事例や発生のしくみをわかりやすく説明し、迅速な避難行動を促すための広報用ビデオ(CD-ROM)第1図を制作した。この制作の過程は、今後、気象に関する防災知識の普及を考える際にも参考になるのではないかと考え、ビデオの内容とあわせ紹介したい。

2. 制作の過程

本ビデオは、2002年度からその内容について検討してきており、2003年度はそれを引き継ぐ形で開始した。

制作は、「1. コンセプトの確認と構成案検討→2. 脚本検討→3. 撮影・音入れ→4. 完成」の過程をたどった。制作については、筆者(広報担当)のほかに、地震火山業務の担当者3名と防災業務の担当者1名の合計5名で、プロジェクトチームを作ってあたることになった。

津波から命を守るために!



第1図 CDのジャケット。

2.1 コンセプトの確認等

最初に、「1. はじめに」に書いた制作目的にもとづいて構成案を検討することから始めた。この過程で「子供たちが主な対象なので、最初に津波のしくみを長々と解説して、飽きられないことがないよう、そして、CGや実写や実験場面を入れ込むようにして、体感に訴えることのできるもの」という基本概念(コンセプト)を固めた。そして、さらに「どんなCGを作るか、どんな映像、写真をピックアップするか、各コーナーの時間的な長さの配分、順番をどうするか」などについても、確定した。

2.2 脚本検討

上述のコンセプトに関する打ち合わせを経て、脚本案が制作業者から提出され、その検討に入った。今回のビデオでは、津波についてなんでも知っている「ツナミ博士」と、「女性アシスタント:さちよクン」の二人の会話により話が進んでいく構成になっている。二人の会話のなかに、津波がどんなに恐ろしいか、そこ

* The making of the video "For Protecting Lives from Tsunami!"

** 気象庁総務部総務課広報室。

© 2004 日本気象学会



写真1 スタジオ収録風景。右奥の青いスクリーンをバックに撮影する。これは、撮影の合間に、せりふの確認をしているところ。中央の女性が、女性アシスタント役の「さちよクン」、両脇は、プロデューサーとディレクター。左下のパソコンで、CG合成したときのイメージを確認しつつ行う。

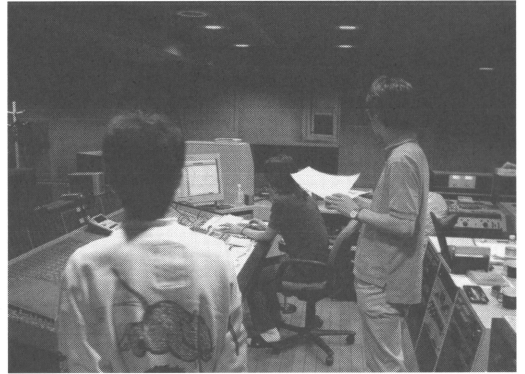


写真2 博士の声等の収録を行ったスタジオの風景。映像との重ね合わせは、パソコンのソフトを使って行っていた。手前後ろ姿は筆者。

からどう命を守ればいいのかについての情報が埋め込まれており、筆者自身、こうした脚本作りの経験がないせいもあり、前回の構成案の結果がこうした形になるのかと、新鮮な気持ちで脚本を読んだ。この段階になってくると、できあがるビデオの姿も少し具体的に見えてくる。しかし、今度は、表現上不正確、あるいは、誤解を受けそうなもの、事実確認が必要なもの、流れが不自然なもの、防災上の観点から別の表現を考えたほうがよいもの、また表現がわかりやすいかどうかなどについて、ひとつひとつ確認していく作業を行う必要があった。何度も繰り返し読むうちに、自分が博士になりきってしまい、別の仕事をしているときも、博士のせりふがつい口をついて出てしまい、笑われたこともあった。

2.3 撮影・音入れ

脚本の内容が確定したところで、撮影となり、これにも最初から立ち会うことになった。今回の舞台となる仮想の「ツナミ資料室」やツナミ博士は、CGで制作したのだが、「女性アシスタント：さちよクン」は、実写でCGの中に登場する。いわゆるクロマキーを使って合成するため、青いスクリーンをバックに撮影と声の収録を行った。脚本にあるせりふをここで初めて声の形で耳から聞くことになり、いくつかのせりふを修正した。その他、表情や、言葉のアクセント、「津波警報」などのキーワードがはっきり話せているかななどについてもチェックしつつ、撮影は進んだ。初めて立ち会ったビデオの収録風景だったが、プロデューサー、

ディレクター、カメラマン、等々、それぞれのスタッフが役割をしっかりと果たすことにより、収録が手際よく行われていると感じた。(写真1)

次は、ツナミ博士の声の収録とBGM等のミックス作業の立会いとなる。さきほどの映像の収録と同様、実際にせりふを耳で聞き、映像をバックにしてみると、うまく重ならないところもあり、細かいところが手直しされた。その他、BGM、効果音についても、ないほうがよいところ、他の音楽にしたほうがよいところなどがあり、修正した。(写真2)これらの作業には、それぞれ、半日を費やした。

2.4 完成

音楽を入れた段階で、タイトル、画像や写真部分へのテロップなどもすでに重ねられており、最終チェックを行った。音楽や効果音、テロップなどが入ると、ずいぶんビデオ全体の雰囲気が変わり、いつもみられているTV等の番組の姿にぐっと近くなる。逆に、TV番組やビデオはこうした要素を重ね合わせてできあがっているのかと、再認識することになった。

最後の試写には、プロジェクトチームから3人が立ち会った。

3. 内容

このような制作過程をへて完成したビデオは、以下のような構成になっている。

全体を通して、ツナミ博士と女性アシスタント「さちよクン」との会話をベースに、話が進んでいく。

① オープニング：過去の津波被害の映像や写真

② 津波被害国日本：日本における過去の津波被害の映像と説明（日本海中部地震、北海道南西沖地震）



写真3 ツナミ博士が、さちよクンに津波発生のおしるしを説明している場面。

③ 津波体験：大津波のCG映像による津波体験や実験装置を用いた津波のすがた、50 cm程度の津波での被害写真

④ 津波の説明：津波の発生のおしるしと特徴についての説明（写真3）

⑤ 津波に対する注意：津波から命を守るためにどうすればいいかの説明

⑥ エンディング：津波に対する注意の再確認

ポイントとしては、小学生でも集中力が続くと思われる17分という時間にしたこと、実際の津波の速度を基本的に津波が迫ってくる映像を真正面から見た場合のCG映像や実写で、津波の怖さを体感してもらうこと、避難することの大切さを繰り返したこと、などがあげられる。

4. 最後に

本ビデオはCD-ROMの形態で、気象庁の各地方気象台等を通し6月下旬から、全都道府県、全市町村に配布をはじめた。また、(財)気象業務支援センターから市販(税込み:500円)もされている。

気象庁のホームページでもダイジェスト版を掲載しているため、是非、一度ご覧いただきたい。

(<http://www.kishou.go.jp/books/tsunami/tsunami.html>) このビデオを見ることによって、1人でも多くの人に津波の怖さ、避難の大切さを知ってもらえれば、と思っている。また、本稿が気象に関する防災知識の普及の際に、少しでも参考になれば幸いである。

最後に、本ビデオの制作と普及に関わったみなさまに、心から感謝いたします。ありがとうございました。

(津波防災広報用CD-ROM)

「津波から命を守るために！」2004年6月制作

企画、制作 気象庁

制作協力 (株)NHKエンタープライズ21

津波ビデオプロジェクトチーム

気象庁総務部企画課

相澤幸治

気象庁地震火山部管理課

松田康平

気象庁地震火山部地震津波監視課

山崎貴之

気象庁地震火山部地震津波監視課

上野 寛

気象庁総務部総務課広報室

板東恭子)